

シップソンパンナーにおける伝統的土器製作の類型と移転

－ミャンマー東部と中国雲南省、タイ北部の関係をめぐって－

徳澤 啓一*・秦 竹軒**・持田 直人**

1. はじめに

中国雲南省西双版纳傣族自治州（以下「西双版纳州」と略記する・第1図）では、『百夷伝』において「百夷人は土器を多用する」と記されているとおり、多くの伝統的土器製作（以下「土器製作」と略記する）が遺されていたもの（張 1959 など）、改革開放政策が進展することによって、ほとんどの村寨で土器製作が停止されてしまったという。

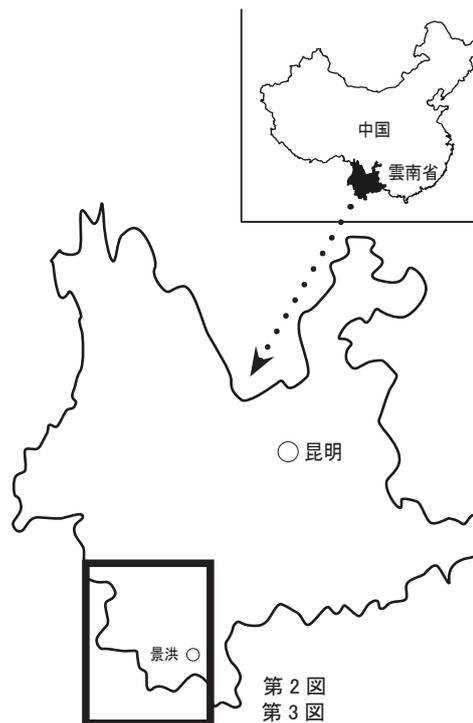
実際、2006年及び2007年、筆者は、景洪市近郊の曼斗寨及び曼閣寨、勐海県の曼扎寨及び曼朗寨の4カ村の現地調査を実施したものの（徳澤ほか 2006・2007、徳澤 2008）、西双版纳州では、これらの村寨を除いて、土器製作を停止した状態になっていた。

すなわち、1950年を遡って、シップソンパンナー時代の傣族の土器製作を明らかにするためには、主として、中華人民共和国の編入以降、中国人研究者が記載してきた現地調査の記録を紐解くことが不可欠となる。

ここでは、『考古学報』第2期（2003年）に掲載されている汪寧生著「雲南傣族制陶的民族考古学研究（雲南省における傣族の土器製作に関する民族考古学研究）」をもとに、シップソンパンナーにおける土器製作の内容と隣接するミャンマー東部やタイ北部の土器製作との関係を見通すことにしたい。

2. 土器製作の類型に関する汪論文の記載

汪論文を読解すると、前半は、シップソンパンナーにおける土器製作を4つに分類し、それぞれの類型に関して、素地製作、成形、乾燥、焼成等の製作技術を整理し、同一類型の村寨間の比較研究を行っている。後半は、シップソンパンナーにおける民族誌を引き合いに出しながら、製作技術及び生産様式に関する考古学的事象の解釈に繋がる民族誌的生態を導き出している。



第1図 伝統的土器製作の村寨の位置
(徳澤・熊代 2011 抜粋一部改変)

また、汪によれば、雲南省の傣族に関して、1980年代初頭まで、少なくとも、30村寨で伝統的な土器製作を保持してきたという。このうち、汪は、1960年代から1980年代にかけて、12村寨を数回にわたって調査した。これらの村寨は、景洪県の曼勒寨（1964年5～6月、1965年4月）、曼徳寨（1965年4月、1982年2月）、曼角寨（1965年4月、1982年2月）、大勐龍の曼南坎寨（1982年2月）、勐海県の曼賀寨（1982年2月）、勐遮の曼海寨（1982年2月）、曼朗寨（1982年2月）、滄源県勐角の俄允寨（1965年1～2月から1982年2月まで）、双江県の曼磨寨（1982年1月）、耿馬県的那緬寨（1978年8月、1982年2月）、勐連

* 岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

** 岡山理科大学大学院総合情報研究科社会情報専攻修士課程在学中

県の帕当寨（1978年8月）、瀾滄県下允の河辺寨（1982年2月）である（第2図）。

ここでは、以下のとおり、汪論文の「1. 傣族の土器製作の4つの類型」の記載をもとに、西双版纳州の土器製作の内容を訳出することにしたい。ただし、訳出にあたっては、逐語訳的、あるいは、直訳的な翻訳を避けている部分があることを付記しておきたい。

なお、“ ”及び（ ）は、汪の原文のままであり、「 」は、筆者による訳出であり、[]は、筆者による注ないしは補足である。

土器製作の12村寨は、4つの類型に分類することができる。紙幅の都合があることから、1つの類型につき1つの村寨を取り上げ、解説することにしたい。その他の村寨の留意点は、適宜、補足説明する。

2-1. 第1類型

6つの村寨が該当する。ここでは、勐海県曼賀寨を取り上げる。

2-1-1. 概況

曼賀寨は、勐海県勐海の中心街付近に位置する。住民は水傣族である（“傣泐”と自称する）。全120世帯（1982年の統計）のうち30世帯が土器製作に従事する。粘土の採取や運搬等の重労働は男性が補助する。製作者は、すべて女性であり、とくに年配の女性が主体である。土器製作は、世帯単位で行われ、女性の副業であり、彼女らの小遣いとなる。農繁期以外に土器製作を行っている。市場が開かれる時、製品を担いで勐海の中心街で販売し、買い手は傣族以外に愛尼人〔詳細不明〕等である。伝承によると、勐海県周辺では、最初、曼賀寨で土器製作が行われていた。曼賀寨の女性が嫁いだことで、その他の村寨の土器製作が開始されたという。

2-1-2. 原材料

粘土の成分は、鑑定によると、石英と水分を多く含むカオリンである。

粘土に加水し、砂を混和する。粘土と砂の割合は2：1であり、木槽に入れて木の棒で混練する。常に使用できるように濡れた状態を保つ。

2-1-3. 工具と設備

木板「棧板」長さ及び幅30cmの板である。製作者は、これを膝の上に置き、粘土紐の積み上げ等に用いる。

木墩「成形台」（木の切り株、鳥籠等の他のもので代用することもある）木取りし、素地とこれを載せる棧板を成形台の上に置き、製作者は、成形台を周回しながら、タタキ等の作業をする。

木括「木篋」長方形と半円形の2種類がある。前者の長さ18～20cm、後者の半径4～5cmであり、素地を調整するために用いる。

木拍と卵石「叩き板と当て具」叩き板は、素面〔以下「無文」と訳出〕と横文〔以下「横線文」と訳出〕の2種類がある。当て具は、直径6～8cmであり、片手で掴め、長期に使用する。製作者は、器壁を締めるために、片手に当て具を握り、内壁から押し出しながら、もう片手で外壁をタタキを施す。最終工程のタタキでは、横線文の叩き板が用いられた場合、考古資料に見られる蘭文〔以下「キャタピタ状のタタキ文様」と訳出〕が残される。叩き板及び上述の篋は、世帯内の男性もしくは木材加工ができる近隣の男性に製作を依頼する。

2-1-4. 製作器種

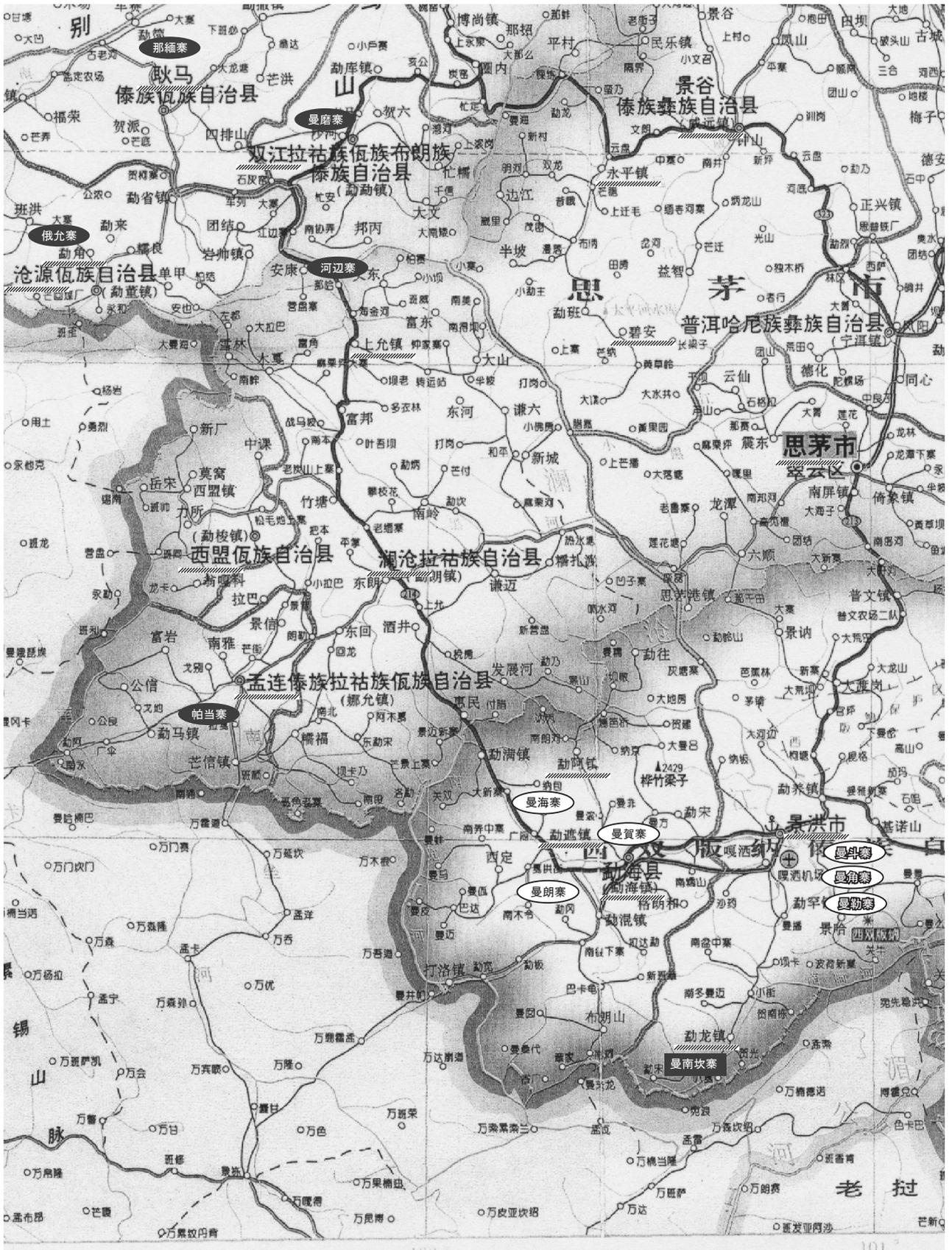
焼成体は、全体的に赤色を呈するが、均彩でなく、部分的に黒灰色又は淡赤色を呈している。胎土の中心部が灰色を呈する。器表面は、キャタピタ状のタタキ文様又は無地である。曼賀寨は、本来、多様な器種を製作していたが、汪らの調査時に2種類しか製作していなかった。

圓底罐「丸底の甕」口縁部は、口唇部が曲折し、胴部は、鼓状であり、丸底を呈する。大きさは、規格的でない。頻出するサイズは、胴部最大径30cm、器高15～20cmであり、楕円形に近い器形である。さまざまな物の容器や水甕、鍋等の多様な用途がある。この甕は大量に製作し、販売している。

火盆「焙烙」皿形であり、3つの脚をもつ。口径35



第2図 西双版纳における傣族の土器製作の調査対象の位置
(汪 2003 抜粋一部改変)



第3図 西双版纳傣族自治州周辺地域における傣族土器製作の分布 (1/2,000,000)

* 第3図は第2図の範囲に相当する。斜線/////は第2図と一致する地名。

(中華人民共和国省級行政単位系列図雲南省地図 中国地図出版社編 抜粋一部改編)

～40cm、高さ15cmであり、傣族の製作器種のうち、唯一の3つの脚をもつ器種である。昔の雲南省でも三足器は見られない。

2-1-5. 成形

丸底の甕の成形を例にとる。女性は、手練りした素地と製作道具を用意し、小さい椅子に腰かけて、棧板を膝の上に置く。棧板の上で手練りした球状の素地を円盤状になるまでタタキ、底部円盤とする。胴部の成形は、粘土紐積み上げ技法を用いる。泥条盤築法「粘土紐輪積み技法」は、主として、泥圈相接「粘土紐輪積み技法」[粘土紐を輪繋ぎし、1輪ずつ積み上げる技法]と長条盤旋「粘土紐巻き上げ技法」[長い粘土紐の巻き上げる技法]がある。曼賀寨では、後者の技法を用いる。1周目は、紐状に素地を揉み出し、右手で粘土紐をもち、左手で棧板を時計回りに回転させながら、粘土紐を底部円盤に押し付ける。同じ技法で、2周目を巻き上げ、2本目の粘土紐を内面側から斜めに繋げる。2、3周すると、円筒形状の原型が立ち上がる。最終周(成形体の口縁部に該当する)は、通常、厚みをもたせるために、もう1本の粘土紐を裏打ちする。原型が立ち上がると、左手で棧板を回転させ、右手で木篋を用いて器面を平滑に調整し、手指又は木篋で内面の巻き上げ痕を掻き消し、粘土紐間の結合を強める。濡れ布で口縁部をナデ挽くことで、口縁部を平滑に成形し、原型を作出する。これを棧板に載せたまま1～2時間乾燥させ、半乾燥の状態で成形台に戻す。女性は、左手に当て具をもち、右手の叩き板でタタキながら、反時計回りで成形台を周回する。まず、無文の叩き板でタタキ、次に、胴部を締めるために横線文の叩き板でタタキを施す。口縁部は、長方形の木篋で軽くタタキを施す。さらに、胴部を膨らませるために、半円形の木篋で胴部の内側から押し出す。最後、平底を丸底にするため、膝の間に原型を挟んでタタキを施す。

焙烙の成形は、上記と同じであり、用いる粘土紐の数が少なく、皿形の体部に3本の太めの粘土紐を貼り付け、脚とするだけの違いである。

成形体ができると、日干しで乾燥、あるいは、軒下又は“干欄式「高床式」”家屋の1階で陰干しする。曇天又は雨天で急いで成形する場合、竹で組んだ棚の上に成形体を載せて火で焙る。成形体を乾燥させるための専用の設備はない。

2-1-6. 焼成

すべて露天で焼成する。専用の焼成場所はなく、製作者が所有する畑又は家屋の周辺の平坦な場所を整理して用いる。手間を省くために、複数世帯で焼成場所を共用することがある。乾燥した成形体が1回分の数量に達

すると焼成する。焼成はできるだけ雨天を避ける。また、風があると、火災を惹き起こす危険性があるので、焼成に向かない。

焼成は女性が担当する。まず、稲藁や薪を地面に敷いて、成形体を列状に配置する。1列あたり4～6個体、成形体の底部と口縁部をはめ合わせながら配列し、焙烙を丸底の甕の上に載せる。脚の折損を防ぐために正位で並べる。1回あたり20～30個の成形体を焼成できる。成形体の上を稲藁や草を被覆し、燃焼させて、灰が厚く累積するまで稲藁や草を投げ込む。そうすると、灰の内側の燃料が十分に燃焼せず、火勢が抑制され、灰の中を一定の温度に保てる。製作者は、適度な火勢となり、火災の危険がないと判断すると、その場を離れる。通常、夜間に焼成し、翌朝、焼成体を取り出す。

2-1-7. 第1類型の村寨間の比較

この類型には、滄源県の俄允寨、瀾滄県下允の河辺寨、双江県の曼磨寨、耿馬県的那緬寨(住民は早傣族の“傣那”と自称する)、勐連県の帕当寨(住民は西双版纳の傣族と隣りの“傣泐”と自称する)が属する。河辺寨は、かつて下允土司及び下允で一番大きな緬[シャンないしはタイ]様式寺院で土器製作していた。全46世帯(1982年の統計)のうち全世帯が製作している。他の4村寨は、一部の世帯しか製作していない。製作者の世帯は減少しつつある。俄允寨を例にすると、1965年1月から2月の調査時、21世帯のうち17世帯が製作していたが、1982年2月の調査時には、24世帯のうち9世帯に減少していた。各世帯では、女性が農業や家事を終えてから土器製作する。男性は、粘土の採掘、市場までの土器の運搬、叩き板の製作等の手伝いをする。製品は、家の近くの道路沿いで販売している。俄允寨では、勐角街、河辺寨では、川向こうの下允街、帕当寨では、孟連県の中心街、那緬寨では、耿馬県耿馬中心街で売り出す。顧客は、傣族以外に付近の佧族や拉祜族もいる。

原材料は、5つの村寨で用いる胎土は、主として、石英とカオリンからなる。各村寨の粘土を採掘する地点は決まっていない。砂を混和する比率は、一定でなく、粘土本来の含砂量によって決める。砂を全く混和しない場合もある。河辺寨の製作者は“手指にひっかからない滑らかな感触であれば大丈夫”と教えてくれた。5つの村寨ともに、木槽で粘土を碎細し、粘土を球状に丸める。

工具と設備は、5つの村寨ともに曼賀寨と同じであり、帕当寨は叩き板の文様がやや複雑であり、横線文のほか、横線文と豎文「縦線文」の組み合わせ文様、有斜文「斜線文」、菠夢文(方格文「格子文」の中に点がある)「パイナップル文」、花の文様の叩き板がある。製作者の世

帯は、さまざまな叩き板を所有しているが、横線文の使用頻度が高い。そのため、製品には、キャタピタ状のタタキ文様が多い。

器種は、5つの村寨ともに丸底の甕を製作している。これは、第1類型の主な製品といってよい。各村寨では、茶罐「湯沸かし釜」、釜、甕を製作する。釜は丸底の甕と類似している。釜は甕を入れるため、丸底の甕と比較すると、開口部が大きいという違いがある。甕には、筭「スノコ」がなく、底部に大きな丸い穴がある。蒸す時に竹のスノコが必要であり、これに対して、那緬寨の甕の底部には、4つの穴があり、2本の細い竹の棒を挿し入れて、十字形に交差させることで、蒸す時に竹のスノコを用いず、代わりに一枚布やヘチマの繊維を敷く。河辺寨も焙烙を製作するが、スノコがある。曼賀寨の焙烙と器形等が異なる。俄允寨では、1965年の調査と比較して、1982年の調査時には、新しい器種が増えていた。それは、漢族が使用する小風炉「コンロかストーブか七輪」であり、燃料は、木炭や練炭であり、暖をとる以外にその上で煮炊きをする。瀾滄県から新しく学んだという。ほかに、帕当寨では、提梁壺「手提げの付いた水瓶」を製作する。帕当寨と俄允寨では、器蓋「蓋」を製作し、摘みは、皿状であり、倒立させると、摘みが脚となり、盛り付けができる「ひっくり返すことで、蓋にも皿にもなる」。帕当寨の蓋の中心に突起状の摘みがあり、動物の意匠に見える。こうした傣族の装飾は、この例しかない。河辺寨には、昔から多くの器種がある。上述した器種以外に、土司やシャンないしはタイ様式の寺で用いる仏鉢、碗と瓢箪形の花瓶等を献納していた。鉢の口縁部に穴があり、紐を通して掛け提げることができる。

成形は、河辺寨と曼賀寨が同じであるものの、その他の4つの村寨が少し異なる。同じように、丸底の甕を例にする。原型を半乾燥の状態にして、成形台に戻すと、周回しながらタタキを施す必要がなく、膝の間に挟んでタタキを施せばよい。まず、胴部を締めるためにタタキを施し、その後、丸底になるように底部にタタキを施す。手持ちでタタキを施すと、原型が破損する恐れがあるので、技術的な難易度が少し高い。この他に、双江の曼磨寨では、粘土紐巻き上げ技法を用いる際、粘土紐間の結合を強めるために、粘土紐間にもう1条の粘土紐を裏打ちする。第2類型及び第3タイプの村寨では、この方法が粘土紐の巻き上げ時に見られるが、曼磨寨にその兆候が見られる。[すべての粘土紐の間に裏打ちをする第2, 3類型と違って、部分的に裏打ちをする]

焼成は、露天平地焼陶法「草木灰被覆の覆い型野焼き」[露天の平地で焼成する方法]である。曼磨寨だけは、

より多くの成形体を配置するため、平地に浅い穴（深さ0.3m、長辺3m×短辺2m）の掘り方を掘削し、1回で多くの成形体を焼成することができる。帕当寨では、成形体の上に稲藁を被覆し、その上に牛糞[牛糞を混ぜた泥漿ないしは乾燥させていない牛糞]を載せる。そうすると、火勢を抑制し、稲藁を投げ込む作業を省くことができる。こうした方法は、第2類型の“燃料密閉法「泥漿被覆の覆い型野焼き」”[焼成配置を密封する方法]の変遷とも受け取れる。焼成場所は、村寨の中の家の密度による。製作者の家の付近に空き地があると、焼成を確認するのに便利であり、家の付近で焼成する。村寨の中に空き地がないと、集約的に村寨の外で焼成する（那緬寨及び曼磨寨）。焼成の最大のリスクは、火災であり、焼成場所の決定に最も考慮することである。村寨の外で焼成する場合、焼成場所は、特定の製作者の所有地ではない。誰も使っていなければ、すべての製作者が焼成場所を使用できる。例えば、那緬寨の外には、焼成場所が3ヶ所あり、40世帯が共用している。1世帯の成形体が1回の焼成数に達していない場合、数世帯が一緒に焼成し、各製作者がそれぞれの焼成体を持ち帰ることもある。製作者は、自分の製品を識別できる。

2-2. 第2類型

第2類型は、3つの村寨が該当し、景洪県曼徳寨（昔の調査で“曼斗”と表記されたこともある）を例示する。

2-2-1. 概況

曼徳寨は、瀾滄江の東、景洪県の対岸に位置する。住民は水傣族である。1965年4月の調査時、全71世帯のうち13世帯が製作者であった。1982年2月の調査では、全120世帯に増加したものの、製作者は4世帯になっていた。景洪市は、西双版纳傣族自治州の州都であり、他地域と比較して、経済や社会の変化が早く、曼徳寨の土器製作は、20世紀に入り、1980年代初頭から急速に消失した。ここでは1965年から1982年にかけての変化を記述する。

曼徳寨の土器製作は、曼勒寨から伝播したという伝承があり、伝播は“大昔”と1940年前後という2つの説がある。製作者は、農業に従事しており、女性が農業以外の時間に土器製作する。男性は、粘土を運搬し、焼成のための燃料を用意する。製作道具（回転台や叩き板等）も男性が製作する。

成形体を乾燥させる専用の設備があり、小屋の中で焼成する。雨季でも土器製作を継続できる。日常的に成形し、販売する前日に焼成し、翌日売りに出す。1982年の調査時には、年配の女性だけになり、彼女らは、農業に従事せず、終日土器製作に従事していた。

2-2-2. 原料

粘土は、村寨の付近から採掘する。鑑定によると、胎土は、鉄分の多いカオリンである。粘土を採掘し、乾燥させ、粉碎し、莢雑物を濾過し、砂を混和せずに（釜等の製作時に砂を混ぜることがある）、そのまま水を回しながら混練し、球状にまとめる。栈板に載せ、濡れ布を被せて、準備する。粘土の粉碎は、穀類の粉碎と同じもの〔唐臼〕、粘土の細粒の選別は、糠を篩掛けと同じもの〔篩〕を用いる。ともに土器製作の道具ではない。

2-2-3. 工具と設備

転盤「回転台」木製であり、形状は逆台形であり、上面が大きく下面が小さい。上面径30～40cm、下面径20～30cm、高さ18～20cmを測る。下面の孔に竹筒を嵌め、竹筒を地面の木製の軸に挿して、旋回させる。製作者は、足の指でゆっくりと回し、速度は6～10周／分である。粘土紐積み上げから成形までの作業を回転台の上で行う。

木刮「木篋」長方形と半円形の2種類があり、形状と用途は、第1類型と同じである。

竹刀 刀子形であり、竹を切削したものであり、長さ20～22cmを測る。原型の器面や口縁部のケズリ等に用いる。

叩き板と当て具 形状と用途は、第1類型と同じである。ただし、横線文（彼女らは“行文”と呼ぶ）以外に、パイナップル文、棋格文（すなわち方格文「格子文」）、蛇文（すなわち波浪文「波状文」）、蓮文「蓮の花の文様」等の叩き面の文様の種類が多いことが異なる。横線文の使用頻度が高い。叩き板に“×”などの数学的な符号が刻まれたものもある。これは、叩き板の製作者又は使用者を表示する記号であり、他の製作者の叩き板と区別できるようにしている。

原型や成形体を乾燥させるための竹の棚 4本の竹の柱の上に竹の編竹又は木の板を載せる。成形途中の原型のタタキのための半乾燥、あるいは、成形体の乾燥に用いる。急遽焼成する場合、棚の下で火を燃やし、成形体を焙り乾かす。地面又は高床式家屋の1階に成形体を置いておいても自然に乾燥するため、この棚を全世界が所有しているわけではない。

焼成場所に関して、曼徳寨の製作者は、通常、いつも同じ場所で焼成する。地面に長方形（3～4m²）の浅い掘り方を掘削し、その上を草葺きの屋根を掛けるものもある。

2-2-4. 製作器種

器面及び胎土の中心部が赤色を呈する。器面に文様が施されるものもある。キャタピタ状のタタキ文様がより

多い。胎土の中心部が灰色を呈することがある。主として、以下の器種を製作している。

平底罐「平底の甕」口縁部が屈曲し、胴部が膨らみ、平底を呈する。胴部最大径40～42cm、器高28～30cmを測る。穀物の容器や水甕等のさまざまな用途がある。平底の甕は、曼徳寨の主な製作器種である。

丸底の甕 口縁部が屈曲し、胴部が膨らみ、丸底を呈する。胴部最大径40cm、器高25～30cmを測る。主として、煮炊用であり、下に竹製の輪台を敷いて、盛り付けや水の汲み置きにも使うことができる。製作数は、〔平底の甕〕より多い。上記の2種類の甕の大きさは非常に規格化されており、製作者は意識的にこの規格を守っていると見られる。

水壺 把手、蓋、注ぎ口からなる。胴部最大径20～25cm、器高20cmを測る。すでに製作されていない。アルミニウム製の薬缶が普及してから、こうした重くて割れやすい湯沸し用の薬缶は最早市場にはない。

湯沸かし釜 注ぎ口があり、胴部には、把手がある。器高15cmを測る。

灯「灯明皿」下面が大きく上面が小さい筒形状を呈する。上面が皿形となり油脂を入れる。下面径15cm、上面径10～12cm、器高35～36cmを呈する。1965年の調査では、製品を実見したが、製作の様子を見たことがない。

蓋 高台付きの皿と類似している。天地を返して口縁部の上に載せる。最大の蓋の口径は、40～50cmを測る。1982年から製作されていない。

2-2-5. 成形

平底の甕の成形を例にとる。製作者の女性は、回転台に対峙して座り、長さ両杵「身体尺で親指と人差し指の間隔が2つ分の長さ」程度の混練した素地を紐状にする（長さ25cm、直径4cm）。粘着を防ぐために、回転台に灰を撒いて、成形を開始する。少量の素地を取り出し、回転台の上に載せて、叩き板でタタキ、底部円盤を作出する。足の指で回転台を時計回りに旋回させ、左手で底部円盤の側縁を支えながら、右手で粘土紐を底部円盤に押し付け、1本の粘土紐で高さ6～7cmの粘土帯を輪積みする。同じように、2本目の粘土紐を繋げる。2本目の粘土紐を内面から斜めに繋げて、結合を強めるために、接合部に細い粘土紐を裏打ちする。合計4段の粘土紐を積み上げる。口縁部を厚く仕上げるために、もう1本の粘土紐を口縁部に裏打ちする。竹の刀で残余の素地を切削し、長方形の篋で口縁部をナデ押しながら外傾させる。左手で原型を支え、右手の半月形の篋（あるいは手指を用いる）を内面に入れて、粘土紐間の結合

を強めるために、粘土紐間の輪積み痕を掻き消すように、下から上にナデ上げ、円筒形状の原型を立ち上げる。左手で回転台を急旋回させて、右手で口縁部を濡れ布でナデ挽くことで口縁部を平滑に成形し、原型を作出した。

以上の工程は、すべて回転台上で完結する。続いて、原型を回転台から竹棚に移動し、半乾燥させ、再度、回転台上に戻し、胴部の下から上にタタキを施す。まず、無文の叩き板を使用し、次に、文様のある叩き板に変更する。タタキは、胴部を膨らませるため、当て具で内面から押し出す。方法は、第1類型と同じである。しかし、曼徳寨の製作者は、原型を周回せず、原型を手持ちすることなく、足の指で回転台を旋回させることで、両手で自由に原型をタタキを施すことができる。最終工程では、手で回転台を反時計周りに急旋回させ、濡れ布でナデ挽きくことで口縁部を平滑にする。口縁部は、[上から見ると]同心円文状の文様[ナデ挽いた際の濡れ布の痕跡]が残される。

他の器種の成形は、同じように、粘土紐を積み上げて(製品の大小は粘土紐の太細、長短で決まるように見える)、タタキを加える。方法は同じである。また、器種によって、圈足「摘み」(蓋の場合)、把手(茶缶の場合)、長流「注ぎ口」(水壺の場合)、圈足「高台」(蓋の場合)[蓋をひっくり返した場合]を作出し、原型に貼り付ける。摘みは、蓋に粘土紐を貼り付ける。把手は、丸い粘土紐を扁平な带状にタタキ、注ぎ口は、1本の粘土紐に竹の棒を挿し回す。また、丸底の甕だけは、原型を膝の間に挟んでタタキ、平底を丸底にする。方法は第1類型と同じである。これだけは、回転台で作ることができない。

2-2-6. 焼成

焼成は、泥漿被覆型の覆い型野焼きを用いる。この方法は、“燃料灶「カマド」”又は“糞カマド”ともいう。焼成にあたり、浅い窪地を整理し、長い薪や竹で4辺を圍繞し、その中に樹皮、木片又は竹片、その上に稲藁を敷いて、成形体を配置する。配置方法は、まず、平底の甕、丸底の甕の底部と口縁部をはめ合わせながら配列し(最後尾の成形体は、口縁部を合わせ口にする)、3～4列を配置する。列間の隙間に小型器種を入れ、口縁部を下向き、ないしは、内向き[焼成配置の中央に向ける]にして、成形体の上と側面を稲藁で被覆し、成形体が見えなくなるまで、稲藁の表面に泥漿を塗り込み、“沙堆「泥の山」”を形成する。世界的に見ると、家畜の糞を泥漿に混ぜて、稲藁の上に塗り込む地域があり、“糞カマド”ともいわれる。1回あたり20～30個体を焼成する。

焼成は、経験豊かな年配の女性が主宰する。彼女は、

松脂を含んだ点け木を燃やし、「泥の山」の4隅から挿し入れ、口で吹いて、中の燃料を焚き付ける。燃料がすぐに燃え尽きないように、再び泥漿で4隅を閉塞する。また、内部の燃焼状態を保つために、指で小孔を穿ち、空気を入れる。点火後、製作者は、しばらく経過を観察し、泥の山の4辺に手をかざし、経験で火の加減を図る。火勢が強い部分は、泥漿で小孔を閉塞し、火勢が弱い部分は、小孔を開口し、順調と判断するとその場から離れる。通常、夕方に焼成し、翌朝取り出す。第1類型と同じである。

2-2-7. 第2類型の村寨間の比較

第2類型は、景洪の曼勒寨と曼角寨が属している。ともに県を中心から離れていない。住民は“傣泐”の水傣族と自称する。曼勒寨は、1964年と1965年の2回の調査時、全26世帯のうち25世帯が土器製作していた。曼角寨は、1965年の調査時、全70世帯、このうち1世帯しか土器製作していなかった。1982年、この1世帯(世帯主の名前は波香仔)は、伝統的な器種を製作しなくなり、彩釉瓦を製作するようになっていた。

曼勒寨は、西双版纳土司(“召片領(傣語でツァオペンディン)”)が居住していた宣慰街と近く、拱衛土司の10の村寨(“三老四練”と称する[詳細不明])の一つである。土器製作は、景洪坝子(中心街)がもっとも有名であり、住民は、土司の遠い親戚や家奴の後裔である。伝承によると、曼勒寨は、本来、舟の渡し場を管理していた、往来する客を接待するために土器を使っていた。土器は、土司から供給されていたが、土司は面倒になり、製作するように命じた。土器製作を開始すると、むしろ村寨の負担が増加した。すなわち、逆に土司に土器を上納しなければならなくなった。この伝承の事実関係を確認できないものの、1950年以前、曼勒寨は、毎年土司に日常用の土器を献納し、賚佛[傣語でタンブン(徳を積む日)]及び節日[仏教に関する休日]に土器を提供する義務があった。当然のことながら、曼徳寨や曼角寨と同じように、曼勒寨では、主として、販売するために製作していた。主として、景洪街及び戛洒街で販売し、景洪族[景洪に居住する傣泐のことか?]以外に、近くの山地に居住する基諸人、愛佤人[詳細不明]及び山達人[詳細不明]、空格人[詳細不明]等の少数民族の買い手があった。

曼勒寨、曼角寨の土器製作は、本来、女性の副業であったが、曼角寨では、1980年代、彩釉屋頂飾「彩釉瓦」を製作するようになると(土器製作と彩釉瓦の両方)、男性の終日の仕事となった。変化の原因を調査すると、1980年代初頭、傣族固有の小乗仏教の信仰が解禁され、

各村寨では、シャンないしはタイ様式寺院の新築や復興のブームとなった。シャンないしはタイ様式寺院の屋根には、さまざまな彩釉瓦が必要であり、その中には、屋根の中心に据える塔形の飾りと屋根の角に据える飾り（“象鼻式「象の鼻を象った形式」”や“斑鳩式「イカルを象った形式」”等数種類がある）もある。内地の古建築上の“鸚吻「鳥のくちばし」”と“兽吻「動物のくちばし」”に相当するが、完全な傣族の様式の飾りであった。彩釉瓦の製作技術に関しては、内地から伝播したという説、あるいは、傣族固有という説があり、曼角寨は、橄欖坝〔詳細不明〕から学んだという。製作器種は、供給が追い付かないほど人気があり、波香仔の世帯は、依然として、農業が主な収入源であったが、波香仔は、農業から離れて、終日彩釉瓦の製作に専従するようになった。奥さんは“農業より稼ぎがよいのでやってもらった”と説明してくれた。女性が従事しない理由を尋ねると“釉薬（彩釉を指している）の調整を学ばなければならないものの、鍋と同じような製作技術であり、私たちができないわけではない。私たちが男性のようにずっと座ったままだと、子供や家畜等はどうなるでしょう”と答えてくれた。こうした説明は、女性が〔家事の合間の〕暇な時間に従事する土器製作から男性の終日専従に変化する原因の研究に新たな解釈を提示してくれた。

原料は、曼勒寨、曼角寨ともに、曼德寨と同じ粘土を使用している。かつて、3つの村寨は、瀾滄江東岸の曼德寨、曼角寨の間の場所から粘土を採掘していた。この粘土は、含砂量が多く、砂を混和しなかった（曼勒寨は時々砂を混和するが通常の1/5しか入れない）。素地製作は、唐臼と竹の篩を用いる。曼角寨では、彩釉瓦の製作に変更してから、専用の木槌と木板を用いて、繊細な素地製作ができるようになった。

工具と設備は、曼勒寨の成形道具は、曼德寨より1つ多い。そこは、篋文「波状文」とか划文「キザミ文」を施文する片端が鋸刃状の竹の工具である。成形体の焙り又は原型を半乾燥させる竹の棚が用いられ、焙り焼き用の竹の棚には、雨天用の草葺き屋根を被るものもある。雨天でも土器製作ができるように、土器製作の場所にも草葺きの屋根や高床式草屋がある。曼角寨では、彩釉瓦の製作に変更してから、動物を象る木の型〔版木型〕が多くなってきた。成形は、依然として、回転台等の道具を用い、この点では、過去と変わらない。

製作器種は、曼勒寨と曼角寨（1982年からの彩釉瓦の製作開始以前）とともに、平底の甕、丸底の甕、湯沸かし釜及び水壺が製作されていた。曼勒寨では、このほかに、土司のためにタンブン用の花瓶や碗鉢等を製作して

いた。これには“銀粉〔銀色の粉〕”（製作を実見したことはない）を塗ることがある。また、景洪の中心地にある各村寨に昔寨神〔伝統的な精霊〕（“披曼〔傣語でピーマイあるいはピー〕”）を祀る祠で使用するための、精霊に供献する小型器種（小さい缶、小さい瓶等）の多くは、曼勒寨で製作された。これらは、注文を請けてから製作する。

成形は、基本的な技法と工程は曼德寨と同じである。曼角寨は、彩釉瓦の製作に変更してからも、同じように、粘土紐積み上げ技法を用いて、回転台上で原型を作出する。事前に、木の型で作出したさまざまな装飾を附加すればよい。釉薬の調整を実見していないものの、インタビューによると、“鉛巴〔鉛〕、赤砂糖に糯米を入れて、炒める”という。これを水で溶かして器表面に塗布する。強くない火で緑色、強い火で赤色というように、焼成時の火力に応じて、異なる色調が得られる。製作者は、火力を調整することでさまざまな仕上がりに焼成することができる。

焼成は、2つの村寨は曼德寨と同じように覆い型野焼きを用いる。曼角寨の彩釉瓦は、窯で焼成する。窯は、レンガ積みであり、屋根はない、篋「火格子」はある。かつて傣族が焼成に用いた瓦窯は、すべて同じである（傣族は、1950年から傣様式の平瓦を製作している。その起源及び製作工程は、他の論文で紹介する）。

2-3. 第3類型

2つの村寨が該当し、曼朗寨を例示する。

2-3-1. 概況

曼朗寨は、勐海県勐遮鎮の南10kmに位置する。住民は、“傣泐”の水傣族を自称する。全56世帯のうち26世帯が土器製作に従事する。主として、女性が農業や家事以外の時間に土器製作する。男性は、粘土の採掘、造窯、製品の運搬等の力仕事のほかに、釉薬を調合し、成形体に鉛釉を施す。製品は、勐遮街の市場で売り出し、近隣の土器製作を行わない傣族以外、愛侶人が買い手である。曼朗寨の土器は、勐海全域で最も良質とされ。現地で“曼朗寨の‘磨’（陶器〔土器〕）は人々に愛される”といわれる。

2-3-2. 原料

鑑定によると、粘土は滑石〔?〕に属し、それはカオリン、粘土鉱物になるまでの中間産物であり、村寨の前で採掘することができる。専用の木槌と木板を用いて精細に素地製作する。粘土を粉碎し、水を回して、1/7の砂を混和する（砂を混ぜなくてもよい）。

2-3-3. 工具と設備

成形道具は、第2類型と同じであり、ただし、弓の

ような工具が加わる。割竹を曲げて糸を弦にしている。これで素地を切り取ったり、回転台から原型を切り離したりする。一部の製作者は、この工具を使用せずに、新たにナイロンの紐を代用している。成形体の乾燥は、第2種類のような専用の設備はない。

焼成は、村寨の外の坂に窯が分布している。坂の下に窯の焚き口を掘り出し、そこから2本の炎の道〔燃燒部を兼ねる〕を掘り抜き、2本の炎の道は、火格子のない焼成部に通じる。窯の天井はなく、焼成時、燃料で天井を被覆する。汪らの調査時、全村寨で5基の窯（窯口径1～1.5m）があった。横一列に配置され、村寨のすべての製作者が使用できる。付近に廃絶された窯も見られる。

2-3-4. 製作器種

素焼きの土器であり、器面にキャタピタ状のタタキ文様が施されることもある。第2種類と類似している。口縁部や内面の一部には、鉛釉が施されているものの、均等に施釉されていない。下記の製作器種がある。

平底の甕 器形や大きさ、そして、用途は、第2種類と同じである。

丸底の甕 いくつかの規格があり、規格度が高い。頻出するサイズは、胴部最大径35～37cm、器高26～28cmを測る。主として、釜や水の汲み置きに使用する。

釜と甌 第1種類（耿馬の那緬寨、双江の曼磨寨、瀾滄下允の河辺寨）と同じような器形であり、釜の口縁部が肥厚し、丸底状を呈する。甌には、スノコがなく、両側に柱状の把手がある。

手揚げの付いた水瓶 器形と大きさは、大体第2種類と同じであり、流通していた期間はきわめて短かった。調査時には、過去に製作された製品しかなく、調査時には、すでに製作されていない。

蓋 器形は、第3種類の曼勒寨と類似している。輪状の摘みであり、甌と組み合わせられる。

碗 器形は、瓷器の碗と類似している。小さな平底を呈する。口径10～15cmを測る。

小瓶 中国古代の酒器の尊と類似している。口径5～10cm、器高15～20cmを測る。シャンないしはタイ様式寺院で用いられる。調査時には、製作の様子を実見できなかった。

2-3-5. 成形

成形工程は、大体第2種類と同じである。素地から底部円盤を作出し、その後、原型の体部を立ち上げる。成形は、粘土紐を巻き上げる技法であり、輪繋ぎした粘土紐を1輪ずつ積み上げる技法ではない。2～3周させてから、手で回転台を急旋回させ、遠心力を利用して、

両手で粘土紐を提拉「挽き上げ」することで、円筒形状の原型を立ち上げる。小さな女の子（通常、製作者の娘又は孫娘）が隣で回転台を急旋回させることもある。そうすることで、製作者の手間を省くとともに、製作技術を教授する機会にもなる。手で回転台を急旋回させる時、速度は、毎秒3～5周である。小型器種の場合、粘土紐を輪状に積み重ねなくても、一気に上に伸ばして、成形にすることもある（汪は、シャンないしはタイ様式寺院で1つの瓶がこの方法で成形されたところを見たことがある）。これは、新しい製作技術の出現を意味している。成形体は、輪製「回転台を用いた挽き上げ技法」で成形することができる。

円筒形状の体部を立ち上げ、口縁部を成形し、原型を作出する。回転台から一時的に原型を移動し、半乾燥させ、再度回転台に載せて、叩き板でタタキを施す。方法は、第2種類と同じである。小型器種は、提拉成形〔以下「挽き上げ成形」と訳出〕するので、タタキを施さない。丸底を成形する場合、第1、第2種類と同じように、原型を膝の間において、丸底になるまでタタキを施す。摘み、注ぎ口、把手を作出し、原型に貼り付ける。方法は第2種類と同じである。

成形体が完成すると、釉を掛ける場合もある。釉薬は製作者が調整する。インタビューによると、釉薬の調合技術は外部から伝播したのではない（昔から保有していた技術という）。調合は、鉛を土器の缶に入れて、加熱して溶解させ、灰を入れて、完全に熔融させる。数名の製作者を訪問したところ、釉薬の調合は男性の仕事であったが、釉を掛ける作業は、依然、女性の仕事であった。彼女らであれば、製品を補強し、漏水を防ぎ、洗うに便利のように釉を掛けると話ししてくれた。また、釉は、口縁部及び内面にしか掛けていなかった。理由を聴取すると、彼女らは、“鉛の値段が高いので、全面に塗るともったいないでしょう。”と答えた。こうした粗製の方法で調合した釉を内面に掛けて、これに食品を入れると、健康を害することを知っているかと尋ねると“昔からそうしているから”と笑いながら答えてくれた。

2-3-6. 焼成

焼成にあたり、焼成部を清掃し、破損した焼成体や破片を焼成部に敷き詰める〔これを火格子の代わりにする〕。この上に成形体を配置する。開放型野焼きと同じように、口縁部と底部をはめ合わせ、4圈を配列し、小型器種を隙間に入れて、口縁部を下向きにすることで、成形体を半円形に配置する。燃料（木材、割竹）は事前に準備する。まず、焚き口から少量の燃料で“烘窯「窯を温める」”。最初から多量の燃料を入れると“器壁の

中心部まで火が通らない”という。ゆっくりと十分な燃料を入れて、火勢を上げる。同時に、成形体の上に指2本分の厚さの稲藁を掛けて、そこから炎が見えると、隙間を稲藁の束で塞ぐことで、火勢を抑制し、窯の中の炎を長時間持続させる。焼成の途中、1回、多めの割竹を入れることで、数分間火勢を強める。これによって、鉛釉が溶解し、成形体に融着するという。点火1時間後、燃料が燃え尽きるのを待たずに、焼成場所から離れる。翌日、冷めた焼成体を取り出す。窯は、村寨の外にあるが、盗難などは一度もない。

2-3-7. 第3類型の村寨間の比較

ほかにこの類型に属するのは曼海寨である。曼海寨は、勐遮の北5km先に位置し、住民は“傣泐”と自称する水傣族である。全33世帯のうち30世帯が土器製作する。このうち、20世帯が頻繁に土器製作する。女性の副業であり、男性は、粘土の採掘、燃料の調達、鉛釉の調整のほか、販売のため製品の運搬を担当する。

原料は、鑑定によると、カオリンと石英に属する。砂は、混和してもしなくてもよい。曼朗寨の素地製作は、木槌でタタキ、最後に足で踏み練る。

成形道具及び窯は、曼朗寨と全部同じである。製作器種は、曼朗寨の器種組成に加えて、斂口鉢（器形は仰韶文化で見られる彩陶鉢と同じ）と小口直唇缶〔詳細不明〕がある。これらは、シャンないしはタイ様式寺院で使用される。提梁状を呈する蓋の摘みは、曼朗寨で見たことがない。

成形は、粘土紐積み上げ技法のうち、粘土紐巻き上げ技法を用いるようであり、回転台を急旋回させ、遠心力を利用して、原型を挽き上げる。一部の大きな製作器種は、タタキを用いず、挽き上げるだけで成形することもある。この方法で蓋を成形するところを見た。小さな女の子が回転台の旋回を手伝うところをよく見かけた。とくに、重くて大きな器種を成形する際、どうしても人手が欠かせない、小さな女の子も楽しそうに手伝っていた。曼朗寨の女の子は、土器製作に興味があり、ほかの村寨のように、土器製作が老婦の仕事という認識〔偏見〕はない。

焼成に関して、曼海寨には、4基の窯がある。1列に並んで築窯されており、村寨のすべての製作者が自由に使うことができる。窯が占地する土地は、村寨の共有なので、誰でも築窯することができる。そして、操業していない窯は、誰でも使用できる。彼女らに誰かが築窯した窯をどうして誰でも使うことができるのかと聞くと“1つの窯で少なくとも3年間使うことができます。毎日焼成するわけではないので、自分が焼成しない時、誰

にも使わせないというように、私たちはそのように考えません”と答えた。また、誰がこれらの窯を築窯したのかと聞いたら、“わかりません。働き者の誰かが掘ったのでしょうか”と答えた。

2-4. 第4類型

第4類型は、曼洪県大勐竜に所在する曼南坎寨だけが該当する。

2-4-1. 概況

曼南坎寨は、大勐竜鎮の西4kmに位置する。近くの南坎河から名前が由来した。住民は水傣族（“傣泐”）と自称する。全80世帯のうち12世帯が土器製作に従事する。先述した3類型と異なり、曼南坎寨では、土器製作が男性専従の仕事となり、女性の製作者を聞かない。しかも、シャンないしはタイ様式の水瓶だけしか製作しない。

西双版纳の傣族（とくに辺境の近くにある）は、昔からこの水瓶を使用している。この水瓶は、元々ミャンマーから伝播した。1940年代、ミャンマー国境の小勐猛地区から“先刀”（“先”とは傣族村寨の統領の名前）〔“刀”が名前ではないか？〕という製作者によって、この水瓶の製作技術が伝播した。一部の製作者は、伝統的な土器製作から新しい水瓶の製作に変更した。新しい水瓶はとても需要があり、景洪等の遠隔地からも購入にきた。多くの収入を得るため、土器製作は、女性が有閑時の仕事から男性が終日専従する仕事になった。世帯の他の成員は、依然農業に従事する。この水瓶は、製作技術が複雑でないものの、終日專業度が高い仕事なので、女性より男性の方が向いている。また、男性は家事等がないので、連続して仕事をする事ができる。これまでのところ、大勐竜では、一部の村寨において、伝統的な土器製作を継続しているものの、曼南坎寨だけは、この新しい水瓶を製作している。

2-4-2. 原料

粘土は、村寨の近くから採掘する。鑑定によると、石英とカオリンに属する。粘土を採掘し、牛の皮（ビニールシートに変更した製作者もある）の上で木棒で碎き、水を回す。

2-4-3. 工具と設備

以下の種類がある。

回転台 木製であり、第2類型及び第3類型と比較すると、台面がきわめて小さく、上面径が12～15cmしかない。軸が床からきわめて高く、長い竹の軸受けに嵌める。各世帯では、数個から十数個を用意している。手で回し、回転速度が速く、毎秒2～3周する。成形の全工程で用いるだけでなく、原型作出後、この上で乾燥

させる。

木製の弧状のコテ 木製であり、片方が「凹状に」湾曲している。2～3種類がある。長さ10～15cm、幅3～4cmを測り、大きさや弧度が違う。瓶の頸部を作出する際、外面にコテを当てて、必要な彎曲度にあわせて作出する。

曲がった棒 木製であり、長さ20～25cmを測る。片端が異なる大きさや弧度になっている。瓶の頸部を作出する際、内面から押し出し、必要な彎曲度を作出する。

竹刀 竹片を削ったものであり、長さ30～35cmを測る。口縁部及び外面の縁辺部の残余の素地を削るために用いる。

竹の弓 割竹を曲げ、糸を引いて弦にする。曼朗寨と似ている。素地を切り取ったり、回転台から乾燥した成形体を切り離す。

じ筒 節を残した竹筒で製作する。片方の竹の節に小さな孔を穿ち、もう片方の竹の筒を入れる。外見上は、子供の水遊びのおもちゃに似ている。長さ30cmを測る。素地を竹筒に入れて、もう片方の竹の筒で押し出すと、孔から紐状の粘土が押し出される。これを貼り付け文様を付加する。

旋棒「ローラー状の回転施文具」竹又は木の棒の片側に牛骨に入れて、先端を丸くする。長さ2～3cm、径約1cmを測る。この（牛骨）の上に丸い孔又は縦の溝を刻む。土器の表面に押し転がすことで、押しピン文様及び柘文等の精細な文様を施文できる。

竹の板 長さ15cm、節が付いてある竹の一段、柘文製作作用。

象豆 盃藤子という豆であり、俗称、象豆という。現地の人々はこれを“老鴉枕頭「カラスの枕」”と呼ぶ。器面に滑らかな光沢をもたせるために、成形体を乾燥させた後、この豆で全体を磨き上げる。

窯 煉瓦造りであり、円形を呈する。二つの隔梁と三つの斜めの火の道を作っている。[2層構造になっており、3方向に焚き口がある。]天井はない。雨天でも焼成できるように、窯の上に屋根がある。村寨には、窯1基しかない。窯の直径は132cm、深さ154cmを測り、すべての製作者が使用することができる。

2-4-4. 製作器種

シャンないしはタイ様式の水瓶の大きさはほぼ同じである。口縁部は小さく、長頸であり、胴部が膨らみ、鼓腹を呈する。平底に輪状の高台が付き、全体が瓢箪形を呈する。口径5～6cm、胴部最大径23～24cm、器高33～35cmを測る。こうした規格にするのは“並べやすい”ためだそう。水瓶の胴部に細長い文様を施し、

頸部に堆文、柘文、押しピン文などを施文する。器面は、黒色で光沢があり、胎土は、やや深い灰色を呈する。

シブソンパンナの気候は熱いので、担いてきた水を水筒に入れたら、飲みにくいし、暫く経つとすぐ熱くなるので、多くの傣族の人々は、この水瓶を保有している。井戸水を汲んできたなら、すぐに、この水瓶に入れ、室内に常備しておく。竹を絡ませて、直接井戸に入れて水を汲むという方法もある。ほかに、曼南坎寨では、シャンないしはタイ様式の花瓶を製作したことがある。買い手が少ないので、注文を請けた時にしか製作しない。

2-4-5. 成形

製作者は、回転台上に粘土紐を1周させて、水瓶の輪状の高台を作出する。[高台は成形後に貼り付けではないか?]水瓶の底部を作出するために、素地から底部円盤を作出し、この上に原型を立ち上げる。同じように、粘土紐巻き上げ技法を用いる。粘土紐を捻じ立てながら、3周巻き上げて、指で接合部の内面を下から上にナデ上げながら、粘土紐間の輪積み痕を掻き消しながら器壁を締める。その後、曲がった棒を内面からナデ押ししながら胴部を膨らませる。これまでの作業は、すべて回転台上で行う。回転台が停止すると、手で旋回させ、回転させ続ける。原型が載っている回転台を取り外し、両膝の間で固定し、竹の板を用いて、両手で胴部を上から下にケズリ、竹の節で一つ一つの柘文を施文すると、瓢箪形の下半部の原型が完成する。引き続き、回転台を旋回させて、粘土紐を1周巻き上げて、瓶の頸の下の膨らみを作出する。外面に木製の弧状の「凹型の」コテを当てて、曲がった棒を内面からナデ押ししながら作出する。じ筒を用いて、細紐状の粘土を押し出し、この部分「瓶の頸の下の膨らみ」と胴部の境に浮線文を貼り付ける。また、その「瓶の頸の下の膨らみ」の上に長い頸部を作出するために粘土を巻き上げ、曲がった棒を内面からナデ押し、長い頸部を作出してから細紐状の粘土を貼り付け、浮線文を作出する。回転台を回しながら、長い頸部にローラー状の回転施文具を押し転がすことで、押しピン文や柘文を施文する。それから、竹の刀で、口縁部等の残余の粘土を切削し、回転台に載せたまま、もう1本の竹柱に差し替えて乾燥させる。[竹の柵のような]成形体の乾燥のための専用の設備はない。成形体を乾燥させてから、竹の弓の弦で回転台から切り離す。最後に、成形体を懐に抱き、光沢を帯びるまで、器面を象豆でミガキ続ける。

成形は、2点注意しなければならない。1つ目は、タタキの工程がないことであり、粘土紐を巻き上げる際、捻じ立てることで締められる。また、瓶の口縁部がきわめて小さく、内面に当て具を入れられない。2つ目は、

第1表 傣族の土器製作の4類型の対照表

類型	第1類型	第2類型	第3類型	第4類型
村寨	曼賀寨、河辺寨、俄允寨、曼磨寨、帕当寨、那緬寨	曼德寨、曼勒寨、曼角寨	曼朗寨、曼海寨	曼南坎寨
製作者	女性、暇なときの仕事	女性、暇なときの仕事（1980年曼角寨の製作者は伝統的でない新しい製品を製作するようになり、その後、男性の専門的な仕事に移行した）	女性、暇なときの仕事	男性、専門的な仕事
製品の特徴	赤色の素焼きの土器、器面の叩き文様	赤色の素焼きの土器、器面の叩き文様	赤色の素焼きの土器、器面の叩き文様、口縁部及び内面の鉛釉	黒色処理の土器、器面の複雑な文様、ミガキ
成形	成形台、粘土紐巻き上げ技法、タタキ技法、膝に木の板を乗せる、粘土積み上げ→タタキ	回転盤、粘土紐積み上げ→タタキ	回転盤、粘土紐積み上げ→タタキ、回転盤を足指で回し、時々手で急回し、遠心力を利用し、小型器種を挽き上げ、大型器種の原型を作出する	小型回転盤を手で早く回し、粘土紐を積み上げる、成形時にタタキの工程はない
焼成	開放型野焼き [草木灰被覆の覆い型野焼き]	燃料密封法 [泥漿被覆の覆い型野焼き]	頂点なしの双火道をもつ堅穴の土窯 [双道式昇炎式窯]	頂点なしの3つの火道をもつ煉瓦窯 [複道式昇炎式窯]

すべての工程が回転台上で完結するにもかかわらず、また、手で旋回させる回転台の速度は、足で旋回させるより速いものの、遠心力を利用して原型を膨らませる成形に向いていないので、底部から口縁部まですべて粘土紐巻き上げ技法を用いる。第4類型は、他類型より文様が複雑で精緻であり、より高い技術といえるが、第3類型の一部で用いられた回転台を用いた挽き上げ技法は、第4類型で見られない。

2-4-6. 焼成

土器を焼く時間の制限はない、乾燥した成形体が焼成する数量に達すると焼成を準備する。焼成は、男性の仕事である。窯内部を片付け、火の道に破損した焼成体や破片を敷いて、水瓶を整然と配置する。下層の焚き口から点火し、ある程度焙ると、破片で天井を閉塞する。破片の上に泥漿を被覆し、焚き口を閉塞する。点火から閉塞まで一日かかるときもある。注意しないとイケないのは、閉塞にあたり、籾殻や谷の屑又は“費買究[詳細不明]”という葉（鑑定していない）を入れ、濃い煙を発生させることである。天井や焚き口を閉塞し、煙が外に漏れないようにすることが、黒色処理をするために重要である。気温が高い又は乾燥した時には、火勢のコントロールが難しい。窯の中は、火勢が強いと、煙が出難くなるので、焼成を禁忌している。

2-5. 4つの類型の比較

上述した4つの類型の土器製作の比較に関しては、第1表にまとめた。4つの類型は、2つの系統に分けることができる。第1類型から第3類型は、雲南省の西

南の傣族固有の土器製作である。成形（回転台の不使用から回転台の使用まで、回転台の足指での旋回から手での旋回まで）と焼成（開放型野焼きから覆い型野焼きまで、さらに、簡単な窯まで）という技術の段階が違ってもかわらず、[素焼きの]赤い土器を製作している。多くの製作器種（丸底の甕、茶缶など）は、3つの類型ともに共通している。器形と製作技法はほぼ同じである。文様は、タタキに伴うキャタピタ状のタタキ文様が残されている。器壁の硬さは大差なく、すべて少し水が染み出す性質をもつ。これは、焼成技術の違いがあるものの、焼成時の最高温度が近く、いずれも1,000℃に達してない。この3つの類型の製品は、考古学者に分類させると、迷いなく同じ土器系統に帰することになるだろう。第4類型は、別系統であり、表面を磨いた黒色の土器に複雑な文様を施し、上述した3つの類型の赤色の土器と明らかに異なる。

3. 第4類型の土器製作の系譜

以上のように、汪論文の一部を訳出することで、1960～1980年代の西双版纳州における土器製作のバリエーションを把握することができた。また、筆者らのこれまでの現地調査の記録と対照することで、20～40年間に生じた土器製作の変容を窺い知ることができると考えている。そのためには、汪と筆者らの調査を結び付ける必要があるものの、改革解放後、村寨の移転や名称の変更が行われ、調査対象の村寨を特定することがきわめて難しい状態にある。

2004年及び2005年に筆者らが現地調査を実施した曼扎寨は、第1類型に該当すると考えられるものの、汪の地名表に記載がない。同じ第1類型とされる曼賀寨に近い場所に所在すると考えられる。また、第2類型のうち、曼德寨、曼角寨は、それぞれ筆者らが調査した曼斗寨、曼閣寨に該当すると考えられる（徳澤ほか2004、徳澤2005）。ただし、曼德寨に関しては、第2類型と異なる土器製作の内容が記載されている文献もあることに注意する必要がある（朱1982）。また、第3類型に関しては、曼朗寨の土器製作を実見することができた。

しかしながら、筆者らの現地調査では、曼南坎寨の所在を確認することができず、第4類型に該当する村寨を見出すことができなかった。ただし、第4類型は、汪によって「緬式」、すなわち、シャンないしはタイの様式とされているとおり、かつてのシップソンパンナーの領域、すなわち、西双版纳州と国境を接するミャンマーやラオス、そして、タイの周縁において、第4類型が現存する可能性が残されている。

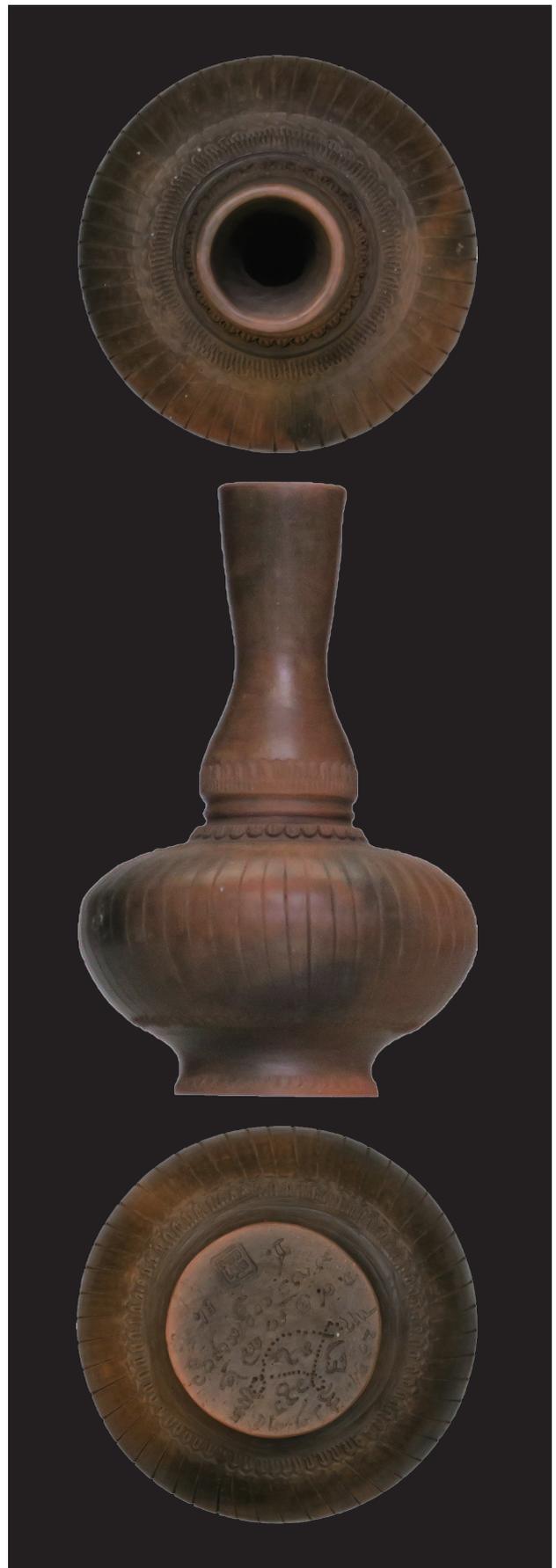
第4類型の土器製作は、小型の回転台を用いて、「粘土紐積み上げ→ノバシ」という成形技法が特徴であり、汪のいうとおりタタキが介在しない。また、冷水瓶ナム・トム（Nam Tom）に象徴されるとおり、製作器種を見ると、特徴的な造形と意匠が凝らされ、器面にミガキを施したのち、黒色処理、あるいは、赤色塗彩されることに特徴がある（図版1）。

こうした土器製作の一群に関しては、リーダム・レファート及びルイス・コートによって、「タイプE」の土器製作と位置付けられている（植崎ほか2000）。

レファートらは、1996年のフィールドワークにもとづいて、「タイプE」の土器製作は、1780年代、ミャンマー・シャン（Shan）州のチャイントン（Kentung）の製作者がタイ・チェンマイ（Chiang Mai）県のムアングーン（Muang Gun）に移住し、「タイプE」の土器製作が開始されたという。その後、20世紀半ば、ムアングーンの「移動製作者」がチェンライ（Chiang Rai）県の2つの村を訪れたことによって、「タイプE」の土器製作がタイ北部に拡散したと記載している（Lefferts and Cort 2012）。

汪、そして、リーダム・レファート及びルイス・コートらの調査によって、「タイプE」すなわち第4類型の土器製作は、1）1780年代、チャイントンからムアングーン、2）1940年代、小勐猛地区から曼南坎寨、3）20世紀半ば、ムアングーンからチェンライ県に移転したことが明らかにされている。

現在、チャイントン、曼南坎寨を別にして、ムアングー



図版1 製作器種 [Muang Gun] (1/3)

ナム・トム（口径5.0cm、胴部最大径18.0cm、底径9.2cm、器高27.8cm）12.8cm、器高22.0cm）



写真1 斜軸方向に小型の回転台が設置された状況
[Muang Gun]

ン及びチェンライ県の土器製作が現存しており、筆者らは、ムアングーンの調査を継続している。成形は、第4類型の「粘土紐積み上げ→ノバシ」技法に近いといえる。焼成は、煉瓦積み昇炎構造体をもつ窯であるものの、第4類型の記載にある「3つの火道をもつ」複道式昇炎式窯でない。ただし、この間、村寨や土器製作にさまざまな変容が生じているとおり、ムアングーンと第4類型の製作技術や生産様式の異同を明らかにすることが難しくなってきた。

また、ムアングーンの土器製作に関しては、「粘土紐積み上げ→ノバシ」技法に用いられる小型回転台の据え方がきわめて特徴的である（写真1）。製作者と相対し、小型回転台の軸を斜めに据え付けており、小型回転台が若干の回転角をもつことによって、回転の持続性が高められている。すなわち、ナム・トムの長頸で胴部が張り出すという低重心の器形に適応した回転台であると考えられる。また、張り出した胴部を中心に文様が施文されるとおり、製作者に対して、原型や成形体を戻上げ気味にすることで、成形や施文に相対しやすくなる。こうした斜めに据え付けられた小型回転台に習熟することで、最大形を胴部上半にもち、胴部最大径が30cmを越える大型の水甕モー・ナム（Mow Nam）を同じように小型斜軸回転台上で成形する製作者も見られる。

また、小型回転台を用いる成形は、第4類型に限らず、ミャンマー国境近くの雲南省徳宏傣族景頗族自治州潞西市芒市鎮芒巷寨で見ることができる（徳澤ほか2012）。ただし、芒巷寨では、小型回転台が正立しており、粘土円柱をノバシ、その後、叩き板を用いたタタキ成形が行われるとおり、第4類型やムアングーンとまったく異なる技法である。

本稿における筆者らの関心は、第4類型とムアングーンの製作技術及び生産様式の合一性である。「2. 土器製作の類型に関する汪論文の記載」を翻訳する限りでは、肝心の小型回転台の据え方が見えてこないのである。レファートらの記述も同様である。

筆者らは、ムアングーン及びチェンライ県の成形技法に関しては、小型回転台を斜めに据え付け、「粘土紐積み上げ→ノバシ」技法で成形することに特徴があることから、「小型斜軸回転台を用いた成形」と呼称している。第4類型の小型回転台の回転角を判別し、第4類型とムアングーン及びチェンライ県の土器製作の合一性を確認する作業が不可欠と考えている。

4. おわりに

今後、西双版纳州、シャン州、チェンライ県及びチェンマイ県の土器製作の異同を踏まえて、西南中国から東南アジア大陸部における「小型斜軸回転台を用いた成形」の展開を把握したいと考えている。そのためには、中緬国境を中心とする地域、すなわち、傣、シャン、タイの領域におけるフィールドワークを進めることが必要であり、また、これらの範疇にある土器製作を新たに見出すことも期待している。しかしながら、汪、レファートら、筆者らの調査から10～40年を経過している。この間、この地域の経済成長と同調し、土器製作の村寨において、経済成長・社会変容を遂げているとおり、土器製作が低調になり、亡失してしまったものも少なくないと考えられる。ムアングーンをはじめとする村寨のフィールドワークを可及的速やかに実施し、「小型斜軸回転台を用いた成形」の出自と系譜を明らかにしたい。

本稿の「2. 土器製作の類型に関する汪論文の記載」は、秦との2017年度の岡山理科大学大学院総合情報研究科社会情報専攻「東南アジア民族誌特論」の講義の一部を整理したものである。「3. 第4類型の土器製作の系譜」は、持田との2017年度の「特別研究」の講義の一部を整理したものであり、持田のムアングーンにおけるフィールドワークは、2016年度の岡山理科大学「岡理GAP」（長期学外学修プログラム）による資金援助を得て実施したものである。なお、本稿の文責は、徳澤にある。

主要参考文献

- 張季 1959 「西双版纳傣族的制陶技術」『考古』（第9期） 488 - 490 頁
- 朱宝田 1982 「云南西双版纳傣族和西盟佤族原始制陶的起源和傳播」『雲南文物』（11期） 67 - 69 頁
- 唐立 2000 「第1章製陶技術」『云南物質文化』（生活技術卷） 云南教育出版社 1 - 70 頁
- 汪寧生 2003 「云南傣族制陶的民族考古学研究」『考古学報』（第2期） 云南民族学院 241 - 260 頁
- 周達生 1979 「中国傣族の土器づくり - 雲南省西双版纳傣族自治州 - 」『季刊民族学』8 国立民族学博物館 74 - 79 頁
- 加藤久美子 2000 『盆地世界の国家論 - 雲南・シブソパンナ - のタイ族史 -』 京都大学出版会
- 徳澤啓一・小林正史・長友朋子 2006 「西南中国における伝統的土器づくりの変容 - 中華人民共和国雲南省西双版纳傣族自治州的伝統的土器づくり村 -」『岡山理科大学紀要』第42号B（人文・社会科学） 岡山理科大学 21 - 40 頁
- 徳澤啓一・劉芳・小林正史・長友朋子 2007 「关于中国伝統陶器制作的变化 - 中華人民共和国西双版纳傣族自治州的伝統陶器制作村 -」『社会科学系研究』第5号 社会分析研究会 11 - 22 頁
- 中村大介 2008 「民族事例における野焼きと窯の接点」『日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』 日本考古学協会 2008 年度実行委員会 1-2 頁
- 徳澤啓一・熊代 裕 2011 「王垂文著「雲南省における朴拉俗（彝族支系）の伝統的土器製作技術」『社会情報研究』第9号 地域分析研究会 85 - 114 頁
- Leedam Lefferts and Louise Allison Cort 2012 *Thai Potters across Borders : Tracking Ceramic Technology in Southern Yunnan and Northern Thailand, Connecting Empires and States (Selected Papers from the 13th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archaeologists, Volume 2)*, National University of Singapore: 362-374.
- 徳澤啓一・片山浩子・張雪 2012 「中国雲南省 - ミャンマ - 国境地域における伝統的土器製作 - 潞西芒巷寨及び福貢加車寨における中国領内の現地調査報告を中心として - 」『社会情報研究』第10号 地域分析研究会 153 - 168 頁
- 徳澤啓一・兪 蕙 2014 「中国人民解放军進駐以前の傣族の伝統的土器製作 - 西双版纳傣族自治州における製作者の移動と身分階層を中心として -」『社会情報研究』第13号 地域分析研究会 113 - 128 頁

